
星を輝かせるな

PINE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星を輝かせるな

【Nコード】

N3715L

【作者名】

PINE

【あらすじ】

部屋にあるものの全てを持ってしても、僕が存在を証明する事は出来ないのかもしれない。最近は常々そのような事を考えていました。僕は少しおかしくなってしまったかと不安になり、精神科を訪れました。先生に「君は愛に飢えているんだ」と言われ、精神安定剤を服用するよう指示を受けました。確かに僕のこれまでの人生から愛を探し出すのはいささか困難でした。だから、これから確かめてみたいと思います。結果的に愛が見つからなくても、見つかったとしても、それが僕に何かを思わせるというわけでは無いんだけれど。

そうせずにはいられなくて、僕は机に向かいました。

僕は、今、ベランダに立っている。それともベランダが自分を立たせてくれているだけなのか。着実に橙色に染まり始めた西の空を、ただじっと眺めている。これも眺めさせて頂いているだけなのか。何か大きな力が僕をこの世界に存在させてくれていて、もう直に、僕はその大きな何かに見放される。簡潔に言えばそういうことなんだと思う。もうすぐ目の前の空は黒く塗りつぶされる。何万光年も先にあるものが輝いて見えるくらいに、その周りが途轍もなく暗い黒で塗りつぶされる。僕は、最近この事実、酷く身震いしてしまう事がある。星が輝いて見える夜に限って災いが起こる。幸せな生活を送っている人がいればその裏には必ず暗く深遠な絶望の淵をよたよた歩いている人がいる。ダイヤモンドは凡人に囲まれて初めて輝くし、その持ち主もまた同様である。上空の風は少し強いらしく、薄い雲は驚くほど速く流れている。一点を見つめていると、とどまることなく、次の雲がやってきて、また後続にバトンを受け渡す。余りの視界の移り変わりの早さに、気を抜くと、自分の方が動いているのかと錯覚してしまう。それはちょうどあれだ。無心で電車に揺られながら、ふと車窓を拝んだ時の感覚に似ている。もちろん皆がそうであるという根拠は何処にもない。ただ少なくとも僕は、たまに外の景色が高速で移り変わってくれているだけなのではないかと思う時がある。そして、駅について、駅さん、迎えに来てくれてありがとうと思った事も、過去に一度だけある。夏の暑さで頭がやられていたという説が濃厚である。

とにかく、そんな風の強い夕暮れ時に、僕は思う事があった。なぜ、この日なのかはわからない。ただ、この日は突然やってきて、僕を薄暗い取り調べ室に放り込んだ。目の前の雲が、僕の思いを乗せてどこか遠く自分には届かないところに連れ去ってくれたら、ここ最近僕の身を脅かしている吐気も少しは収まるのだろうか。何と表現

したら適切なのか想像もつかないのだ。だから僕はその無名の症状に吐気と名付ける他無かった。実際に嘔吐した事は一度も無いのだけれど、その吐気と名付けた症状は、ゆっくりと、そして着実に、僕の中からある種の潤いを奪っていったのである。

ふと部屋の方を向き直り、本棚に目を向けた。並んでいる小説は無秩序に並べられ、積み上げられ、カバーが無いもの、帯までしっかりついているもの、ひどく色褪せたもの、部屋のありとあらゆる書物が、行き場を無くした絶滅危惧種の小動物のようにひっそりとハンターの目から姿を隠すように積まれていた。一番上には、ある作家の上下巻が並ぶようにして積まれていた。上巻下巻で色が違い、どちらかが緑でどちらかが赤だった。埃という埃がその上に積もり、赤色、緑色と相まってホワイトクリスマスさながらの銀世界を想像させた。思えば、もう随分本を読んでいない。最後にした本のあらずじは勿論、タイトルも思い出せない。僕の中では、所詮それ程の位置づけに過ぎない本だったのかもしれない。そしてそのつまらなさに、僕は本を読む事をやめたのかもしれない。それとただ単に活字の羅列に嫌気がさしたのか、好きだった作家の作風が変わってしまったからなのか。当時付き合っていた女の子に、私は本を読む人が嫌いだと言われてやめたような、そんな理不尽な理由だったようにも思えてくる。何もかもが定かではなく、何もかも輪郭がぼやけて、境界線が分からない。どこまでが実際に僕の身に起こった事なのか、思い出そうとただけでまた謎の症状が僕の存在意義を脅かして、時々とんでもなく全てが恐ろしくなる事がある。全てが正夢のようで全てが夢で、真実はとっくの昔に独り歩きして何処かに消えてしまっているのかもしれない。

気がつくと僕は、右手にシャープペン、左手にA4版のノートを持って、窓際にポツンと陣取った学習机の前に腰かけていた。僕の右手一本分の幅しかないその机が、妙に可愛く、懐かしい。僕はそこにノートを広げた。

どうしてそんな事をしたのか、僕はおおよそのところは想像でき

た。ただその行動は、確実に僕の管轄外の神経によって伝達された信号によって脳が判断した事だった。この世界ではそれを本能と呼ぶらしい。昔こんな言葉を聞いた事がある。「神の最大の失敗は人に本能を与えた事と、それを制御する能力を与えなかった事だ」もし神が僕達に本能を与えていなかったら、僕は今この机の前にはいないし、そもそも僕もない。人は本能を失くしても、セックスをするだろうか。本能があつたとして、それを制御する能力を得た人間は、セックスをするだろうか。解らない。僕自身、本能を失くした経験も無ければ、制御した経験も無いからだ。もし、僕に本能が無かつたら、大学四年間で交際した四人の恋人と、四人の親友に出会っている保証は何処にもない。

僕が今、ペンを執つたのは他でもない。ただ唐突に、これまでの自分の人生、特に怒涛のように通り過ぎた大学生活を活字にすると一体どのくらいになるのか、そしてそれにはどのくらいの月日が必要なのかと気になったからというだけだ。全ては本能が独りよがりを出した結論でしかないのだ。そこに僕の意志が介入する隙は、ミツバチの鼻の毛穴程しかなかった。僕の意志は、その隙間から、ほんのささやかな希望を託して、四人の親友と四人の恋人とそこを通り過ぎた僕の生活を文章にしようと決めた。そしてその文章を、自分への最後のプレゼントにしたいと思う。この文章を書き終える頃、自分が何を考え、何を感じているのか、現時点での僕には、全く想像がつかない。もしかすると最後まで書き終える事さえできないかもしれない。もし書き終えたとして、それが納得のいく文章になっている自身はまるでない。読み返す気分にもならないかもしれない。読み返しているうちに、文章を訂正したくなってしまうのが怖い。今から書く文章を訂正するという事は、僕がこれまで生きてきた人生と、それを歩んだ自分自身の人格を、自ら否定する事と同等だからだ。

この文章を書くに当たり幾つか問題があつた。まず、第一に今の僕には現実と虚実との判断が曖昧であるという事だ。この文章を書

く事で、それが幾らかでも改善してくれば、棚から牡丹餅のような気分だ。僕にとって、それが現実か、全くの出鱈目かと言う事は、所詮それ程の問題ではないのだろう。そしてもう一つ、僕は今から書く物語を思い出そうとすればする程、例の症状が頭を覗かせて、それ以上思い出すなと脅迫されているような気分になる。ちょうど胸と腹の間辺りだと思う。僕の身体の中で、どす黒いもやもやとした気体が拡がって、酸素が追い出されて、呼吸困難になってしまうような、そんな苦しみだ。どうすればその気体を体外へ追い出す事が出来るんだろうと本気で考えて、考えた事を本気で後悔する。その繰り返しだった。自分でも馬鹿らしくなるし、誰にも信じてもらえないかもしれないが、その黒い気体は、もうすぐ僕の身体を支配し、その結果、僕は大きな力に見放される。だからその前に、僕の本能は、僕に文章を書いてみると言う。だから書くのだ。ただそれだけの事なんだろう。

新しい生活に合わせて新しい靴を買った。その靴に合わせて新しいズボンも買った。確かそんな春だったと思う。僕が考えていたキャンパスライフよりも三倍くらい刺激的で、五倍くらい退屈だった。サークルにも入らず、かといって授業にもあまり顔を出さない。講義室の近くのベンチに座ってありったけの太陽光と活字の暴風雨を浴びた。天気が良いのか悪いのか判らなくなって、度々僕は気分を悪くした。それがいつも夜に一人で飲んだウイスキーのせいだったと気づくのはもっと後の話だ。とにかく僕は気がつくといつも本を読んでいた、それを認識するたびに、本を読むのをやめて遠くを眺めた。そしてそうしていると決まって、同じ女の子が向かいのベンチで居眠りしているのが目についた。僕の座るベンチからは十メートルくらい離れていたが、僕はその子の寝息や寝言をはつきりと自分の中に落とし込む事が出来た。勿論それは実際に僕の耳から入りこんできたのではなくて、もっと別の経路からの侵入者だったと思うのだが、明確に何処から入ってきたかは僕の想像の範疇を超えていた。とにかく僕には、彼女の呼吸や、それに伴う心臓の鼓動を手取るように感じる事が出来た。それは僕が超能力者であるからとか、不思議な力に目覚めてしまったからという話をしたいのではない、それ程までに彼女が自然体で全てをさらけ出していたというだけの話だ。そして多くの学生が通り過ぎて行く中、僕だけが彼女の前で足を止めたということだ。僕が彼女を見る時、たいてい彼女は眠っていた。起きている時は起きている時で淡々と本を読んでいた。それが本当に本を読んでいるという状況に当てはまるのかどうかは僕の距離からはわからなかった。僕から見た正直な印象は、「本と一緒に寝ている」だった。確かに彼女が本の一ページ一ページを捲っているのは見えるし、目線が文章を追うのに合わせて頭が微かに揺れているのも確認できた。しかし、正確な意味での「読書」

の印象とは少し違ったイメージを受けた。本が彼女に読まれたがっているのだ。彼女に読まれた文章はその一字一字がそのまま彼女の身体に染み込み、読み終わる頃にはその小説は灰のように崩れて地面に同化する。そしてそこにまた新しい小説が実を付けて彼女に読んでくれとせがむ。その繰り返し。そんな印象を受けるのだ。だから僕の目に映る彼女は少なくとも小説を読んでいる事は確かだったが、それが自発的な行為であるのか、それとも本からの申し出にしぶしぶ従っているのかどうなのか、断定するにはヒントが二、三欠落していた。ミステリー小説、恋愛小説、歴史、文学、SF、ファンタジー、ありとあらゆる小説が彼女を求めて実を付け花となり、また土に帰って行く。繰り返しされる食物連鎖の一端を担うかのようには彼女と小説の上下関係が生態系に深く刻まれ、その関係が消滅すれば世界が終ってしまうのではないかと不安が頭をよぎった。そう考えていると彼女が勇者のようにも見えるから不思議だ。

少しずつではあったが、僕は、自分が、彼女が放つ何かしらの魅力に引き寄せられ始めているのではないかと思うようになった。だから、毎日のようにそこで居眠りをする彼女が、一日でも顔を見せないと不安になるようになってしまっていた。そして、彼女の姿を見なかった日の夜に限って嫌な夢を見た。小説の増大に耐え切れなくなった彼女が、自ら命を断つという夢だ。夢の中では僕と彼女の知り合いで、彼女が自殺をする時はいつでも直前に僕のところに連絡が入った。そして彼女の家に走り、必ずその途中で、落とし穴に落ちて気を失った。僕が、彼女が自殺したという連絡を受けるのは決まって病室のベッドの上だった。彼女の母親と名乗る五十代くらいの女性が僕に報告に来てくれるのだ。なぜ彼女の母親が僕の存在を知っていて、娘の凶報を届けてくれるのか。僕には全くわからなかった。ただ、それが夢というものなんだろう。

そしてそんな夢を見た次の日は決まって、僕は恐る恐る大学に行き、恐る恐る講義室の外のベンチに座る。そして恐る恐る視線を上げて、胸を撫で下ろす。暗く長いトンネルの先に一点の光を見たよ

うな気分になった。そして、朝起きてベンチに座るまでおどけてブルブル震えていた自分を嘲笑するのだ。一体どうして、そんな夢を見せたのかわからない。もっと言えば、どうして僕はいつも落とし穴に落ちて彼女の家にたどり着く事が出来なかったのかもわからない。そして最大の謎は、僕にこの夢を見させた奴の正体は誰なのかと言う事だ。この人間が見る夢についての話は、現時点で人類が抱える謎トップ百というものがあるとすれば、それにランクインしよるかという非常に難解なものであるため、僕に分かるはずもないのだけれど、それを考えずにはいれなかった。

僕はいつでも結論を急いでしまう人間なのかもしれない。解らない事を見る時、人は、その人なりの薄いフィルター越しにそれを見ようとする。人が最も落ち着く場所は、全ての事が納得という保護シエルターで包まれている状態の場所なのだ。そして僕もそんな避難所に逃げ込もうとする人間の列記とした一人だ。穴があつたら入りたい。恥ずかしい事に僕は、人と人の間でしか生きて行く事ができない列記とした人間の一人なのだ。だから僕は、それへのささやかな抵抗に、夢に対して決して納得しない。色眼鏡で見たりしないし、規定されたものさしでそれを測らない。あくまでもそれを未知なるものと捉え続け、それについて考え抜きながら、ゆっくりと息を引き取る。そして次の誰かがまたそれについて真剣に考えれば良い。人が全てに納得し受け入れる時、文明は終わる。確かにそんな事はこれから何百年も起こりうる事ではないのかもしれないけど、この言葉自体が持つ意味は、決して覆る事のない事実なのだ。もう一度記す。人が全てに納得し受け入れる時、文明は終わる。想像しただけで心臓の鼓動が速くなる。そしてもしも何百年後かにその時が訪れるのなら、その何百年か後を生きる僕の後輩達に、一つだけ言葉を残したい。「ありがとう」不毛な争いがそこで終わるのだ。

話を戻す。僕は、いつまで経っても彼女に話しかける事が出来ずに

いた。入学から一カ月と半月が経とうとしていた。相変わらず僕はベンチで本を読んだ。読む量は以前よりも幾分か増えたようにも思えた。そしてそれは僕が自覚してした事だった。僕は、少しでもたくさん小説を読む事で、彼女の負担を軽減してあげたかったのだ。彼女の負担が少しでも減れば、時間にも心にも余裕が出来て、僕と話す隙を与えてくれるかもしれない、そう考えたら、読まずにはいれなかった。そのせいで僕は授業に出ている時間が少なくなり、それに伴い小テストの成績も悪くなった。それでも僕は、自分が本を読む事が、彼女のためになると信じてやまなかった。何かするものが欲しくて、結局は、それで納得させただけなのかもしれない。恐ろしい事に僕も、文明を止めるのに一役かっていた。

入学してから二カ月近くが経とうという頃になっても、僕には友人と言える友人は一人もいなかった。一人でも十分に楽しいからとか一人の方が落ちつくからとか、そんな決まりきった言い訳をするつもりは毛頭ない。僕の方からすると何をどうしたら大学という不毛な場所で友人を見つucker事ができるのか、そちらの方が不思議でなかった。

講義が終わると、真っ直ぐ家に帰り、斜めに傾きかけた鉄の階段を上って、煉瓦色の扉のノブを回す。鍵はかけない事になっていた。もしも僕の部屋に空き巣が入ったところで、その部屋の質素さに慄き逃げ出すに違いないとたかをくくっていた。部屋の三分の一はベッドが占めていたし、それを除けば、僕の部屋は、牛小屋とそれほど変わらなかった。僕は、それまでの人生で牛小屋に空き巣に入った泥棒を知らなかった。だから鍵はかけなかった。

アパートに帰ると、テレビで流行りの番組を見たり、オーディオで流行りの音楽を聴いたりした。勿論小説も読んだし、たまに絵を描いた。腹が減ったら料理を作った。初めての一人暮らしはそれなりに充実していた。作れる料理のレパートリーが目に見えて増えていく実感が嬉しかった。最初のうちは買ってきたものをただフライパンに放り込んで炒めるという極めて荒削りな調理法を採用していた。出来上がる頃に立ち上るそれらしき香りに満足した。三日に一度は必ず洗濯をした。洗ってくれるのは洗濯機で、その過程を見守っているわけでもない、洗濯機を買うのに出資したわけでもないのに、なぜか僕は満足感に浸る事が出来た。洗濯終了直後の洗濯機に頭を突っ込み何度も同じ香りを嗅いだ。勿論何の変哲もない洗剤の香りだ。しかし僕はそこに一人暮らしの香りを見出す事が出来て、それが一層僕の満足度に貢献してくれていた。

しかし、さすがに二カ月という歳月は、僕を退屈の浜辺に追いやる

には十分過ぎる期間だった。波の満ち引きで浜辺に辿り着いたガラクタには全て目を通したし、潮干狩りもしたし、オイルを塗って日焼けもした。最後には砂浜に自分自身を埋めてみたりもした。幼稚園の時に、両親に連れて行ってもらった小さな公園にある遊具を遊び尽くしてしまい、子供ながらに酷く手持ち無沙汰になってしまった事を思い出した。そしてそれとほぼ同時に「井の中の蛙大海を知らず」という諺が頭に浮かんだ。井の中の蛙がもしも僕だったら、今の僕にとっての大海は何を指しているんだろうと考え、僕の頭はパンクしそうになった。

僕は、頭の中のごちゃごちゃをとりあえず部屋に並べてみた。そうすると僕の質素な部屋も、良い感じに生活感に溢れた、一人暮らしの大学生にぴったりの部屋になった。そうして空っぽになった頭を抱えて外に出た。外は異様なまでに空っぽの僕を受け入れてくれた。外は雨が降っていて、近くの田んぼからは蛙の合唱が聞こえた。空っぽになった僕の頭は、瞬間に蛙の鳴き声の餌食になった。田んぼを過ぎても暫く蛙の鳴き声が頭から離れなかった。しかし、それは僕にとっては好都合だった。何も考えたくない心境に、頭の中に蛙の鳴き声が絶え間なく反響しているという状況は心地よかった。暫く歩くとけたたましい騒音で、頭の中の鳴き声の余韻がかき消された。目の前を電車が通り過ぎた。

市内に着いて駅前的大通りを進みそこから未曾有通りを右に折れ、また暫くして小さい路地を右に折れた。駅前で配られていたチラシに掲載されていた地図通りに進むとそういう道順になった。店の中に入ると、マスターがカウンター越しにやる気のないいらっしませを呟いて、それを追いかけるようにして元気の良い高く柔らかい声のいらっしませが心地よく僕の湿ったシャツの横をすり抜けて行った。テーブル席に三組、カウンター席に一人。平日の午後六時にしては客入りが良い印象を受けた。僕はカウンターに座り、マスターにジャックダニエルを注文した。するとマスターがやる気のない声で、ロックで良いかいと尋ねてきたので、僕はやる気のない

い声で水割りをお願いしますと応えた。

マスターがシェイカーを振っている横で女の人が僕のジャックダニエル水割りを作ってくれていた。僕よりは幾分か年上のように思えた。目の周りの化粧が印象的で、身体は病的に細く、そのせいか胸の膨らみが強調されていた。女の方はカウンター越しに僕にジャックダニエルを渡してくれて、そのついでに「何かあったの？」と尋ねてきた。僕が、きよんととしてジャックダニエルを受け取るのを見て、また女の方は「こんな早い時間に一人でこんなところに来て、ジャックダニエルなんて今時の大学生がやる事じゃないでしょ。それにあなたまだ若そうだし」と言っただけでほほ笑んだ。

「むしろ何も無さ過ぎてここにいますよ」と答えた。

「ここに来る人はね、とんでもない怪物に心を蝕まれた人か、その怪物を探している人か、どっちか何だよね。つまりあなたの場合は後者で、怪物を探している最中って事になるのかしら」

ちよつと違いますねと応えようとして言葉を飲み込み、そうですねというて頷いておいた。大海を探しに来たと言ったところで、話ますます複雑になるだけだと思ったからだ。

「だったら丁度良い。ポール君の話でも聞いてあげてよ。怪物に出会えるかもしれないよ」

女の方はわけのわからない事を呟きながら、カウンターに座っていたもう一人の男の方を見た。すると男がこつちを向いて恥ずかしそうに会釈してきたので、こちらも恥ずかしそうなふりをして会釈をした。どの角度から見てもその男とポールというファーストネームを結び付けて考える事が出来なかった。その男は日本人よりも日本人らしい顔つきをしていた。百歩譲ってもハーフは愚かクオーターにすら見えなかった。これがポールとユミさんとの出会いだ。

すっかり日が暮れた。もうすぐ恐怖の時間がやってくるのかと思うと、僕の全身の毛はよだち、血の気がどこか僕の身体ではないところへ引いていくのがわかる。改めて部屋全体を見渡して、入学当時からあったものと無かったものを分別してみると、入学当初なかったもののほうが圧倒的に多いのに気がついた。本当に自分がここで四年間過ごしたのだという実感が湧いてきて妙に不思議な気分になった。テレビの上に埃まみれのカバのぬいぐるみとキリンのぬいぐるみが置いてある。テレビの隣には、CDラックと、それに入りきらないCDが積まれ、床には、赤紫色の絨毯が引いてあって、少し背の高いこたつ机がその上に陣取っている。部屋の隅には扇風機と、キッチンから追われるように逃げてきたポットと電子レンジがある。僕の部屋のキッチンは異様に狭く、冷蔵庫と食器棚を置くとそれだけで一杯になってしまっていた。ただ、そのどれを持ってしても僕の存在を僕に確信させてくれる事は出来なかった。その事が僕を不安にさせてその度に僕は苦し紛れに絶望の淵で犬と一緒に日向ぼっこしながら散歩をした。

一か月前だったか。僕は精神科に行った。最初は内科に相談した。最近、良く吐気に襲われると。僕は、症状を説明した。胸と腹の間あたりに何か詰まっているような気がして、その度に吐気に似た症状に襲われると。そこまでは内科医は親身になって話を聞いてくれた。しかし僕が、もうすぐ自分は大きな力に見放されてこの世から消えてしまうかもしれないと口にすると、内科医は深いため息をついてから、私の知り合いに有能な精神科医がいるから紹介してあげようと言った。

その次の日、僕は内科医に教えられた通りの住所を訪れた。電車から降りて駅から一時間くらい山の方に向かって歩いているとその建物は突然僕の視界に入ってきた。昔からある洋館をそのまま病棟

として使っているような建物だった。庭には少し広めの花壇があって、その傍らには古ぼけたブランコがあった。玄関まで進んでも、そこが精神科だと分からせるための看板も幟も何も無かった。ただ、玄関にプレートが付いていて、そこに「Aznavour」と書かれてあるだけだった。建物に入ると、正面に受付があつて、そこに世にも奇妙な前髪をした中年の看護婦が座っていた。他に患者がいなかったらしく、受付で症状を説明するとすぐに奥に通してくれた。通された部屋には、精神科医の先生がいた。僕はそこでも内科で説明した通りの事を言った。

「話は聞いているよ。今日はまずお互いを良く知るために肩の力を抜いてお話をしようじゃないか」

白髪混じりの精神科医が僕に微笑みかけてきた。それは胡散臭い占い師が六星占術で客の未来を占う時に垣間見せる表情に似ていた。精神科医は僕に対して様々な質問をした。好きな食べ物から始まり、誕生日や最近興味のあるニュース、最近最後にいつセックスをしたかなど実に様々な質問を繰り返した。僕はそれらの質問に時には親身に、時には適当に答えておいた。質問のネタが切れたのか少しの間精神科医が考え込んでいた。

「最近楽しかった事は何だい？」と精神科医が思いついたように言った。

「それがすぐ思い浮かんだらここには来ていません」

精神科医は世にも奇妙な高笑い浮かべ次の質問を繰り返してきた。

「そもそも君はどうして今日ここに来たんだい？」

「わかりません。ただ最近の僕は以前の僕に比べて何か変わってしまっているような気がするんです」

精神科医は何も言わずじつと僕の目を見つめている。僕は続けた。

「それでその変化がこれからの僕にどんな影響を及ぼすのかが想像がつかないんです。うまく言えないけど、僕はこの四年間くらいの間に、様々な大切なものを失って、そしてこれからもずっと何かを失い続ける人生が待ち受けている気がするんです。そして最後に失

うのは自分自身なんじゃないかって不安になって、そうすると例の症状が顔を覗かせるんです」

精神科医はおもむろに立ち上がり奥の部屋へと姿を消した。診察室の中は異様な程の静寂に包まれ、時計の針が時間を刻む音だけが静かに響いていた。針が動く音一回一回が僕の心臓を突き刺して、行き場の無い痛みが僕の身体中を駆け巡り、僕を終焉の舞台へと駆り立てる。こうしている間にも僕は何かを失い続け、消滅への歩みを進めているかと考えて僕は頭を抱えた。

診察室の入り口のドアが開く音がして振りかえると、世にも奇妙な色の口紅をした中年の看護婦が入ってきて言った。

「あなたもうすぐ消えるわね」

僕は最初看護婦が何を言っているのか理解できなかった。自分が消えると誰かに言われたのが初めての体験だったからなのかもしれない。しかしじわじわとその言葉の持つ恐怖が僕の頭を支配し、それと同時に看護婦の冷たく輝く瞳が僕の眉間の辺りを串刺しにした。

「あなたはもうすぐ地球の歴史上から削除される。パソコンのデリートキーを一押しした時みたいに、いとも簡単にあなたの人生は歴史から切り取られるのよ。あなたがこの世界でしてきた事は全て空白になる。真っ白よ。驚くほど真っ白。そしていつか誰かの人生に塗りつぶされるの。ちょうどあなたがゴキブリを踏みつぶす時みたいに何の躊躇いも無くな」

看護師の顔が見る見るうちに醜くなっていくのが分かった。白目が血走り眼球が今にも飛び出そうで、鼻息が荒く、妙な色の唇は高笑いで張り裂けそうだった。僕は下半身に違和感を覚え、ふと足元を見た。僕のつま先が無くなりかけていた。消滅はみるみる内に進行し、ついには僕の膝下がいとも容易く消え失せた。僕はあわてふためいて部屋中を転がり回った。机の上に積まれたカルテの山をぐちゃぐちゃにして床に放り投げ、精神科医が座っていた椅子を看護婦の方に勢いよく投げた。椅子は看護婦の顔を捉え、看護婦の顔はみるみる内に血に染まり、膝から崩れ落ちた。手の指がびくびく動

いていた。それから僕が座っていた椅子を天井に向かって勢いよく投げた。蛍光灯の破片が勢い込りに飛び散って、部屋が暗転した。そしてもうその時には僕の身体はへそより上の部分だけになってしまっていた。僕は怖くなつて診察室から出ようとしたけど、奥の部屋へと続くドアも入口のドアも鍵がかかってびくともしなかった。僕は診察室の机の引き出しから金槌を見つけ出し、ドアノブに向かってつてそれを勢いよく振り下ろした。ドアノブは鈍い音を立てて吹き飛んだが、それでもドアは開かなかった。もう僕の身体は、両腕と肩と首と顔しか残されていなかった。僕は諦めて天を仰いだ。破壊された診察室はその様相に似合わず相変わらずの静寂の中にあつた。そして相変わらず時計の針だけが部屋の音を支配して、着実に時間の流れを教えてくれていた。気がつくと僕は手に持った金槌を時計に向かって投げていた。金槌はいびつな放物線を描き勢いよく時計に命中した。

「止まっているエスカレーターを歩いた事あるかい？」

「あると思う」

僕はミカミの唐突な問いかけにそのように答えた。

「じゃあその時に味わった感覚を覚えてる？」

「なんとなく」

「止まっているエスカレーターはただの階段と変わらないはずなのに、それを昇ったり降ったりしようとする、何とも表現し難い感覚に襲われる。俺はね、今まであれに似た感覚を何度も体験してきたんだ」

「どういうこと？」

ミカミは僕の質問には答えずに二本目の煙草に火をつけた。ミカミは暫く自分が口にくわえた煙草から立ち上る紫煙の向こうに霞む景色をぼんやりと眺めていた。

「話を変えるけど良いかな？」

「良いよ」

「俺はずっと前、幼稚園児くらいの頃から疑問に思ってる事があるんだ。これは恐らく誰でも一回は考えた事がある事だと思うし、それでいて明確な答えは存在しないんだろうけど、敢えて君にこの質問を投げ掛けてみても良いかな？ 正解なんて無いんだからあくまでも君が考える君なりの君らしい答えを話してくれば良いから」

「良いけど、僕にはそんな気の利いた君を納得させうるような模範回答を提唱する自信は無いよ」

ミカミは大笑いした。

「俺が求めているのは模範回答じゃないんだよ。あくまでも君の考えが知りたい。むしろ君の考えが模範回答と呼べる代物なら俺は興ざめだ。そしてそもそもこの質問に模範なんてものは存在しないんだから」

「どうしてそんな質問を僕にするの？」

「特に意味は無いよ。ただ君の意見が聞きたくなった。たまに無性にラーメンが食べたくなる時ってあるだろ？」

僕は何も答えなかった。

「あれと同じだよ。無性に君の意見を聞きたくなった。人は死んだらどうなると思う？」

「えっ？」

それは余りに唐突で余りに漠然としすぎていて彼の質問というのがそれである事に気づくの少し間が空いた。

「これまでたくさんの人が抱いた大問題だよ。偉い学者や著名な文化人が幾度となく立ち向かった大問題。色んな説が有るみたいだけどね。でもね、その偉い人たちが必死になって考えた説が全くの出鱈目で、君が瞬時に閃いた考えが真実っていう可能性もない訳じゃない」

僕は何も言えず天を仰いだ。考え込む僕を見てミカミが言った。

「何も今すぐに聞かせてくれと言ってる訳じゃないんだ。君の中で答えが完成した時に教えてくれればいいんだ」

「わかったよ。でも次までの宿題って事で良いかな？ 今直ぐにはとてもよい考えが浮かびそうにないよ」

「もちろん。でも一つ注意点がある。俺が言ってるのはね、輪廻転生とか死後の世界なんて話では無くてね、もっと本質的なところなんだ」

ミカミは少し熱くなってしまったのを恥じるように頭を掻いた。

「わかったよ。でも期待に沿えるかはわからないな」

「いや、いいんだ」

ミカミは、空に向かって紫煙を吐き、短くなりすぎた煙草を靴の裏で潰してから灰皿に投げ込んだ。そして立ち上がって言った。

「そうだ。良いところに連れて行ってあげるよ」

それだけ言い残してミカミは喫煙所を後にした。

僕はそれから暫く喫煙所に留まり、ミカミの質問について考えて

いた。その間に何人かの学生が喫煙所に入りし。学生達は麻雀の役の作り方の話や彼女の作り方の話、さらには浮気相手の作り方の話で盛り上がっていた。一人の男が先日参加した合コンに関しての談義で一芸を博している中で、僕はずっと「死」について考えていた。もう一人の男が合コンで使えるマル秘テクニックについての講義を繰り広げている時、僕は「生」について考えていた。やがて学生達は喫煙所を後にした。幾ら考えてみても、気の利いた答えは見つからなかった。それについて思考を巡らせれば巡らせる程、焦燥感に苛まれ、堂々巡りの思考回路のサーキットで、詰まらないアイディアばかりがデッドヒートを繰り広げてはクラッシュした。

ミカミから急な連絡が入ったのはその次の日の事だった。彼は電話越しに僕を飲み会に誘った。ミカミは僕に女を紹介してあげるよと言ってきた。彼は僕の返事を聞かないうちに待ち合わせの時間と場所を決めてから電話をきった。待ち合わせ時間まではあと三時間しかなかった。僕はそれまでそのような飲み会に参加したことが無かったししようと思ったことも無かった。だから仕方なく僕はいつも通りの休日の昼下がりを過ごすことにした。テレビをつけると旅番組やクイズ番組が放送されていた。僕はドキュメンタリー番組を見ることにした。その番組では、世界中の学生の海外インターンシップの受け入れや送り出しを支援する非営利組織についての特集が放映されていた。ブラウン管の中では、僕と同年代の学生が企業を回り海外研修生の受け入れ要請を行う場面が流れている時に、僕は夜の飲み会の事を考えていた。画面に映る学生たちの平和についての討論会が白熱し物議を醸し出している時に、僕は昨日、喫煙所にいた学生が語っていた合コンで使えるマル秘テクニックを必死になつて思い出そうとしていた。そしてそんな自分を空に浮かぶ雲のように遠くから眺めて酷く落胆した。頭から飲み会の事が離れなくて、気晴らしにオーディオでパンクロックを大音量で流したり、飛びきり冷えた氷水を頭から被ったりしてみた。それでも効果は無かった。

もしかしたらこれが本来の合コン三時間前の過ごし方なのかと想像を膨らませてみるものの、その馬鹿らしさにもう一度自らに氷水をお見舞いしてやった。これがもし大学生の合コン前の日常だとしたら、学生寮は毎日がパンクロックの嵐で、日本中の氷水は、温暖化で北極の氷が溶けると同様、じわじわと減少を続け、しまいに日本中は海底都市と化してしまうに違いない。それでも富士山の八号目よりも上は相変わらず大気中に顔をひょっこりと覗かせて鳥のかすかなさえずりの聴き手として存在し続けるのだろう。

今頃ミカミは何をしているんだろうとふと考えた。彼の事だからどうせ「生」について本気で悩み考えているか、「性」についての実習教育を熱演しているかされているかといったところだろうと予想してみたら、彼ほど自己矛盾を体现しているやつも珍しいなと思った。

彼と出会ったのは、まだ街が梅雨のどんよりとした空気から覚めあらぬ六月の終わりの事だ。天気キャスターが梅雨の終わりを宣言するタイミングを今か今かと見計らっては自然の理に踵を返され狼狽していたような、そんな夏の始まりだったと思う。久しぶりの晴れ間が天空を覆い包み、くっきりと七色に色分けされた虹が南の空を幻想的に映し出し見るもの全てに夏の到来を予感させた。その七色の橋はそのくっきりとした輪郭で僕の脳に働きかけて、そのせいで僕の寝起きの身体全身に動けという指令がヘモグロビンと一緒に運ばれてきて、無意識の内に僕は身支度をして外に繰り出した。

原因と結果を安直に繋ぎ合わせるなら僕は虹に導かれてミカミと出会ったという事になる。

その日の講義は昼からだったので普通なら正午を少し回ったくらいに家が出るのが常だったが、七色の空峡が未知なる世界への招待状を僕の前に叩きつけ、早く起きないとパーティーに遅刻するぞと発破をかけた。だからまだ半開きだった瞼を無理矢理こじ開けた。そしてその結果として僕はミカミと運命的な出会いを果たしたので

ある。そしてミカミを取り囲む独創的な世界観の中に足を踏み入れた僕は、一瞬にしてその世界の住人となる事を了解し、それ以来ミカミの荒々しくも繊細な思考の断片をビスケットの如くかじりながら生活を続けてきた。

じつとりと湿ったシャツの不快感で目を覚ました僕は、診察室のベッドに横になっていた。自分でも驚くほどの汗をかき、その汗はこぞつて僕の綿100パーセントのポロシャツとベッドのシーツに染み込んでいた。そのせいで僕の上半身は生暖かいゼリー状の沼に引きずり込まれた時のような何とも心地の悪い状況に見舞われていた。起き上がり、部屋の様子を一通り見渡してから安堵の息を漏らした。僕の消滅がどうやら夢の中のおとぎ話だったと言っことを認識できたからだ。看護婦の仰々しい薄ら笑いや下半身が無くなっていく時の恐怖感を思い出して背筋がぞくつとした。奥の部屋へと続くドアが開いて精神科医が姿を現した。相変わらず胡散臭い黄色い縁のレンズの小さい眼鏡をかけ、緩んだ口元とは反対にその奥の眼は笑っていないかった。

「ご機嫌はどうか？　少し落ち着いたみたいだけど」

「一体何が起きたんですか？」

精神科医は本気で言っているのかと言わんばかりに鼻息を荒くして言った。

「大変だったんだよ。話をしている途中で急に意識を失ったかと思うと、今度はベッドの上で大暴れ。本当に何も覚えてないのかい？」
最初僕は精神科医が嘘をついているのかと思った。それ程までに僕には記憶がなかったからだ。

「君はしきりに『消えたくない』と連呼していたんだ。僕が、人間はそう簡単に消えたりはしないから落ち着くんだとなだめても、その手を振りほどいて神に乞うようにして天井に手をかざして『助けてください』と叫んでいたんだよ。一体気を失っている間に君の中で何が起こったっていうんだい？　君さえ良ければ少しそれについて聞かせてくれないかな？」

僕はその質問には答えず、精神科医の狭い額の辺りを見つめながら

眩いた。

「ちよつと外に出てきても良いですか？」

僕は頭の中に渦巻いている様々な感情をもと有るべき場所に戻す作業、つまり思考の整理をしたかったのだ。精神科医に話すのはその後でも遅くはないだろうと思った。精神科医はそれを快く受け入れてくれた。この時くらいからか、本当の精神科医は、僕が彼に対して抱いていた第一印象とは少し、或いは全く違う人物なのかもしれないと思い始めていた。人は見かけによらないとは昔からよく聞かされたものだ。

精神科医がこの建物には中庭があるのだと教えてくれたのでそこに行ってみることにした。どういうわけかそこには印象派の台頭クロード・モネの絵画を彷彿とさせるような睡蓮が浮かぶ池があった。頭上には隠れんぼ気取りのシャイな太陽が鬼の様子を伺うように少しだけ顔を覗かせていた。それでも十分すぎる程に太陽はその光を僕のいる中庭にまで届かせて、睡蓮の池の水面に乱反射した自らの光を眺めては満足げに雲の裏に逃げ込んでいった。それが繰り返される事によって、刻々と中庭の光と影の調和やバランスが変化した。僕は脇の木造のベンチに腰を下ろし、移り行く陰と陽の境界線をぼんやりとした視線で追いかけてまわした。どれだけ冷静に振る舞ってみたところで、結局自分自身を騙す事は出来なかった。僕の頭は酷く混乱しており、身体中の全細胞が、消滅する事への恐怖心で震え上がっているのがわかった。精神科医の「人間はそう簡単には消えない」という言葉を思い出して心を落ち着けようとしてみても「そう簡単には」という部分を反芻して、心もとない心理状態に陥った。精神科医の発言は裏を返せば「ごくたまに人間は消滅することがある」という風に理解できやしないかと考えて、僕は静かに息をのんだ。

僕はその日ティファニーのいつもの席に座り、静かすぎる違和感を酒のつまみにジャック・ダニエルを飲んでいた。ティファニーとはやる気のないマスターとその手伝いのユミさんが経営するバーの名前だ。僕が初めてティファニーを訪れてから丁度四カ月が経つ水曜の夜の話。僕は毎月二十八日はティファニーの日と決めて、必ずそこに足を運んだ。僕が初めて訪れたのが五月二十八日だったからと言っただけの話だ。僕はそれから、六月二十八日、七月二十八日、八月二十八日の夜をティファニーでマスターとユミさんと過ごした。一か月に一度、月の終わりになるとどういっわけかマスターのやる気のないいらっしやいませが聞きたくなり、ユミさんの優しい笑顔に会いたくなった。そして九月二十八日の夜もいつものようにそこを訪れた。

店内に入ると、聞きなれたやる気のないいらっしやいませが僕を迎えてくれた。しかしその日はそれに優しく覆いかぶさり店内に響き渡るはずの高い声のいらっしやいませが中々聞こえてこない。平生を装いいつもの席に座り、いつもの酒を注文した。いつもならユミさんが作ってくれる僕のジャック・ダニエルにはその日はマスター直々に腕を振るうことになった。その日、店内にユミさんの姿は無く、その代わりにカウンターに一人佇むポールの姿があった。僕はポールを自分が座る席の方に呼び寄せて一緒に酒を飲む事にした。彼と本格的に話すのはそれが初めてだった。四力月前に彼に会った時は、ユミさんを介しての会話がメインだったし、彼は次の日仕事があるという理由で僕と出会ってからものの三十分程でティファニーを後にしていたからだ。

その日の店内には、マスターとポールと僕しかいなかった。マスターは奥の方で何やら伝票の整理をしていたので、僕とポールは二人きりで話をする事になった。まず僕は彼に対して前々から気にな

つていた質問を尋ねてみた。

「ポールは何でポールなの？」

彼は何も言わずに彼が飲んでいた琥珀色のカクテルの方に目配せした。グラスの淵を輪切りのレモンがはさんでいた。そして少し黒みを帯びたチェリーが紅一点グラスの中を彩っていた。考えてみれば前会った時もポールはそのカクテルを飲んでいたような気がした。

「それがどうかしたのかい？」

「このカクテルはね、シンガポール・スリングって名前なんだよ。此処にきてこればかり注文していたら、ユミさんにある日突然ポール君って呼ばれるようになったんだ。ただそれだけだよ。だから此処を一步でも出れば僕がポールと呼ばれる事は無いんだ」

「でもどうしてスリングでもシンガでもなくポールなんだろう？」

「うーん、わからないな。丁度今日は水曜日でユミさんは休みだし、今度会った時にでもきいてみようかな」

「ユミさんは水曜が定休日なの？」

「そうだよ。水曜だけじゃない、金曜日も確か休みだったと思う」僕はそれを聞いて少しほっとした。てつきりユミさんがもう二度とこの店には現れないと思いついていたからだ。考えてみればこれまで僕は、うまい具合に水曜と金曜はティファニーへ来た事がなかった。

暫く沈黙が続いた後で不意にポールが言った。

「ジャックは今彼女はいるの？」

僕がジャックというところに食いつこうとするのより早くポールは「あつ、ジャックっていうのは君の名前ね。いつもジャック・ダニエルを飲んでるから。お互い様だから文句は無しだ」と付け足して微笑んだ。

「ポールとジャックか。悪くないね」

「だろ？ アクション映画に出てくる主人公の二人組みたいで格好良い。ポールが銃使いで、ジャックが剣士さ」

そう言つてポールは手で銃の形を作つてカクテルグラスに浮かぶチ

エリーを打つふりをした。

「それでどうなんだい？」

「ん？」

「彼女」

「あー。いるよ」

嘘ではなかった。僕には彼女ができていたのだ。ミカミが開いてくれた飲み会がきっかけで知り合った女の子。飲み会の後何度か二人きりで遊び、その内にどちらからというわけでもなく交際がスタートした。

「へー。じゃあそれなりに充実したキャンパスライフを送ってるってわけだ」

「それがそうでもない。彼女は僕の事を愛してくれてはいないんだ。そして丁度それと同じ分だけ僕も彼女の事を愛していない」

「どういう事？」

「僕には人を愛するという事がどういうことかわからないんだ。愛してるって言葉は一体どんな状況にある人が使って良い言葉なんだろう？ その人とキスをすれば、いやもつと言えばセックスをすれば愛なのかな、それとも一人でいる夜にふとその人の顔が浮かんできたらそれはその人を愛していると呼べるのかな。愛って言葉の意味は十分に理解しているつもりでいるんだ。でもね、それがどういう状況なのかと訊かれたら僕はそれに答える事ができない。例えばね、愛と言う名前の箱があったとして、僕はその箱の大きさやデザイン、材質なんかをぴたりと形容する事が出来る。でも、その箱の中にあるものは全く見当がつかないんだ」

「確かにそうかもしれないな」

ポールは何度も頷きながら目の前のコースターをいじっていた。

「ポールはどうなんだい？ 彼女はいるのかい」

「いない。俺はどうもそういうのには向いてないらしいんだ」

僕はそれ以上はそれについて尋ねなかった。ポールの目が訴えているように見えたからだ。それ以上訊かないで下さいと。

伝票の整理を終わらせたマスターが表に姿を現した。僕はすかさずおかわりを注文した。ポールにも何か飲まないかと進めると、彼はギブソンとナッツのオードブルを注文した。

「何でシンガポール・スリングじゃないんだい？」と僕は尋ねた。

「ちよつと待ってくれよ」と言ってポールが咳込んだ。

「俺だってたまには違うものも頼むよ」

マスターは僕達が注文したものを全て出し終わるとまたすぐに奥の方に姿を消した。

ティファニーにユミさんがいないのは僕にとって物足りなさを感じさせる要因でしかなかったが、それでもポールとこうしてたわいもない話をしているのは心地よかった。苺が乗っていないショートケーキのメレンゲの間の生クリームの中に黄桃のスライスが入っているのを発見した時の心境に良く似ていた。ポールは僕と同級生のはずなのにどこか大人びて見えた。ミカミも大人びてはいるのだけれど、彼のそれとはまた違う種類の大人だった。その雰囲気は僕には心地よかった。

時刻はもうすぐ二十三時になるうかというところだった。

「ポール、明日は仕事じゃないの？」と僕は尋ねた。

「明日は休みなんだ。午後から少し下調べしなきゃならない事があるけどそれは別にそんなに大したことじゃないしね。ジャックは明日学校だろ？」

「大学に行くか行かないかなんて事は僕にとってはどっちでもいいんだ。だから朝起きたら行くし、起きれなかったからといって頭を抱えなければならぬという話でもない」

ポールは何も言わず半分くらい残ったギブソンを一気に飲みきってからげつぷをした。それから僕の開いたグラスを眺めてから「次の店に行こうか」と微笑みかけた。それから僕達は二軒飲み屋を回って家路に着いた。

次の日は夕方まで一度も目が覚めなかった。それから夕食を適当に作ってそれをゆっくり噛んで食べ、その後また寝た。そういうも

の
だ。

二年生になった。僕は一年間で半分以上の授業の単位を落とした。普段は優しいチューターの先生に、耳がちぎれるくらいの説教を浴びせられた。その間、僕の頭は、前の日の夜に飲んだジャック・ダニエルのせいでかち割れそうだった。チューターの先生が言うところによると、二年生でどれだけ頑張って単位を取り戻すかで、留年するか否かが決まると言う事だった。別れ際とにかく頑張れと言われた。

その足で僕は、パソコンがある部屋に行って前期の授業の履修登録を済ませた。改めて、時間割を眺めて、また頭が割れそうになった。月曜から金曜までで、開いているコマが、三つしかなかった。それ以外は全て何かしらの授業で埋まっていた。

毎日は、三倍くらい速く過ぎるようになり、六倍くらいつまらなくなった。授業のせいで本を読む時間がほとんど無くなった。そしてそれに伴って講義室の向かいのベンチに座る本読みの女の子の姿も見なくなった。ミカミと一緒に過ごす時間も激減した。しかしそれは僕の方が忙しくなったからというよりは彼が学校に余り姿を見せなくなっただけからという方が適切な表現だった。どれだけ忙しくても僕は毎月必ず一回、二十八日だけはティファニーでユミさんの笑顔に惚れたし、たまに一緒になったポールとたわいもない話で大笑いし合ったりした。

講義を受けるのは僕にとって苦痛以外の何物でもなかった。ただ何故かその頃の僕には大学を辞めるという選択肢は全くなかったし、そのくせ留年したくないというプライドだけはやけに高かった。だから僕は、苦痛な毎日の講義も仕方なくまじめに聞く事にしていたし、ノートもしっかりととった。

ミカミの姿を久しぶりに大学で見た。一週間に三度ある空きコマの一つの時間だった。喫煙所で煙草を吸っているところを僕が通りか

かった。ミカミは久しぶりと言う代わりに、煙草を啜えたまま手を挙げた。

「最近あんまり学校に来てないみたいだね。どうかしたのかい？」と僕は尋ねた。

「いや、別に何もないよ。今家に女子高生が棲みついているんだ」「どういう事？」

「二カ月くらい前の夜、俺は家の近くのコンビニに行ったんだ。したらそのコンビニの前で一人の女子高生が駐車場の縁石に座って何やら悲しげな表情を浮かべていた。彼女は、今高校二年生で、家出してきたと言った。家出と言ってもその日の朝普段通り学校に行くと言って家を出かけたきり帰っていないというだけの話だった。

俺は、早く家に帰れと言ったけど一向にそこを動く素振りを見せなかった。だから俺は、年頃の女がそんなに簡単に男に下着を見せるものじゃないと言ってやった。そしたら彼女ははつとして、立ちあがって顔を赤らめたんだ。そしてそれとほぼ同時に彼女の腹の音が鳴るのが聞こえた。段ボールの中でタオルにくるまれて捨てられていた猫の鳴き声そのものだった。コンビニで二人分の夜ご飯を買って二人でとりあえず俺の家に向かった。その後の事はあんまり覚えてないな。とにかく、そんなわけで今俺の家のベッドは女子高生に占拠されているんだ」

「ちよつと待つて。女子高生が君の家に居座っているのと、君が学校に来ないのにはどんな関係があるの？」

僕は正直な疑問をミカミにぶつけた。彼は少し考えてから言った。

「目が見えないんだ」

少しの間、沈黙が会話を遮った。何と反応して良いかわからなかった。

「目が不自由なんだ、その女の子。だから俺が身の回りの世話をしているんだ」

「二カ月間も？」

「そう。でもね、たまにはこうやって大学に来る余裕もあるんだ。

最近じゃ、彼女も俺のアパートのつくりをほぼ完璧にマスターしてくれたみたいでトイレや風呂もお手の物さ。俺の代わりに洗濯だとしてくれるようになった。だからこれからは大学にも普段通りこれそっだよ」

「家の人は？ その子の家族は心配してないのかい？」

「それが分からないんだ。彼女は全く心配してないんじゃないかと言っていたけど。警察にもそれとなく訊いてみた。でも搜索願も出てないみたいだった。どこの世界に、自分達の娘、それも目が全く見えない娘が、二カ月間も家に帰らなくて、搜索願一つ出さない親がいるんだよ？ どう考えても正常じゃない。そんなところに彼女を無理やり送り返すわけにはいかないだろ」

ミカミの言う事は一理あったが、それでもそのような犯罪紛いにも思えるような行為を彼に続けろとは言えなかった。

「もしかしたら、搜索願を出してないだけで、彼女の両親はこの街中を這いずりまわって、彼女の事を探し回っているかもしれないじゃないか」

ミカミは黙り込んでしまった。遠くを見る目はいつもよりも少し憂いを帯びて、それでいて裏付けのない自信にも自嘲にも似た何かが白目と黒目の境界線から滲み出ていた。彼の目には今何が映っているんだろう。彼の頭には今どんな思いが駆け巡っているんだろう。

もつと言えば、彼の鼻はどんな臭いを感じ、彼の耳はどれほどの音を汲み取っているのだろう。その全てが僕の思考の三つくらい上の次元で語られなければならないような印象を受けた。

「ミカミ」

僕は彼を初めて名字で呼んでみた。そうしなければならぬどこか厳粛な空気が喫煙所を支配しているように思えたからだ。

「ミカミ、僕にも教えてくれないか」

自分でも何を言っているのか解らなかった。僕は続けた。

「君を動かしているものはなんなんだい？ 欲望か？ 本能か？ それとも慈善心？」

「止まっているエスカレーターを歩いた事はあるかい？」

「あると思う」

そう答えたところでデジャブに似た感覚に襲われた。しかしそれはデジャブではなかった。以前に実際に経験した会話だったからだ。

「俺は止まっているエスカレーターの上を歩かされているんだ。妙な違和感と一緒にね。エスカレーターが動いていたら俺は女子高生なんて拾わなかった。エスカレーターが動いているなら俺は何もしなくても目的地に辿り着く。例えばそれが死と呼ばれる場所であつてもね。でも今、というか今までずっと俺は止まっているエスカレーターの上を生きてきたんだ。解るかい？ エスカレーターが連れて行ってくれないなら自分で歩くしかない。妙な違和感に苛まれながらも、着実に一步步歩いていかなきゃならないのさ。そしてエスカレーターが女子高生を救えないなら俺が救ってあげるしかない。この場合のエスカレーターは社会の事さ」

そう言いきってミカミは立ちあがった。

「じゃあ君は、ミカミリュウイチは、これまでの人生でどれだけの人を救ってこれた？ それでその数は君がこれまで泣かせてきた女の涙とどっちが多いんだい？」

胸が締め付けられた。時間を戻したいとこれほど思った事は無かった。僕の身体の中で着々と堆積していた埃の山がせきを切ったように溢れだして行くような感覚で、僕の理性とは別の所から思いもよらない形で溢れだした。ただそれは決してミカミを非難したかったわけではない。ミカミの考えを僕の中に落とし込みたくてした質問だと言う事を伝えきれぬまま、見切り発射の状態で僕の言葉のミサイルが彼の心臓を串刺しにしたに違いなかった。

「違和の砂嵐が俺の内部に砂を撒き散らしては水分を奪っていく。止まっているエスカレーターを歩くとはそんなものなんだと思うんだ。ある種の違和の狭間でしか、違和と共にしか、生きる事を許されない。それが俺という人間なんだ。だからって俺がやってきた事を肯定するつもりはないし、仕様がないと知らんふりを極めこむつ

もりもない。だから君が僕の事をそうやって揶揄するのも喜んで受け入れようと思う」

ミカミの発言全てが正しいような、それでいて全てが道を外れているような、そんな不思議な印象を受けた。僕にとって違和とはミカミそのもののように思えた。勿論、此処での違和は、彼が思っているような揶揄を示唆する類のものではなく、もっと抽象的で、かつ神秘的なものだ。

ミカミは違和と生きてきた。僕は一体何と生きてきたんだろう。そう考えて酷く寂しくなつて涙が少しだけ溢れた。涙を流すようなところではないのだけれど、色んな思いが交錯してとにかく涙が溢れた。僕はミカミに気づかれないように背を向けて、目やにを取るふりをして涙を指で拭った。

「お前には、目やにがいるじゃないか」

ミカミが呟いた。全てを見透かされている気がして背筋がぞくつとした。振り向くとミカミはいつものように紫煙の中に佇み含み笑いを浮かべていた。

二年生で迎えた七月二十八日。例のごとく飽きもせずには僕はティファニーのドアを引いた。ドアのノブを引いた僕の腕は強い衝撃を受けた。いつもは開くはずのドアが開かなかった時に腕が受ける反動が、瞬時に僕の身体中の感覚器官を研ぎ澄まし、そのせいで僕の寝ぼけ眼の六個目の感覚器官が嫌な予兆を感じ取った。ドアの横に目をやる。すぐには受け入れる事ができない言葉が漢字三文字で並んでいた。たった三文字が僕の月に一度の楽しみを引きちぎった。そしてもう二度とその楽しみと僕が引きあわされる事は無かった。

>貸物件<

夢なら醒めてくれと切に願った。悪い冗談なら早くネタばらしをしてくれと祈った。移転の告知のチラシを探して血眼になって辺りを駆けずり回った。そして静かに天を仰いだ。風に問いただしてみても、植木を羽交い締めにしても、月明かりを人質にとってみても、誰一人として重い口を開こうとしなかった。僕は無音のピストルで辺りの風景を穴凹だらけにしてやった。ティファニーが忽然と跡形もなく姿を消した夜。空は悠然たる星々の煌めきでより一層の暗闇に沈んでいた。ユミさんの優しい笑顔、マスターの無精髭、シンガポール・スリングに浮かぶチェリー。僕にティファニーを連想させてくれるものがぐるぐると頭の中を流れていた。お気に入りの曲をエンドレスリピートにしてから眠る時の感覚。ただもうそのどれもがここには存在しない。まるで最初から無かったのではないかという馬鹿な考えが浮かんでとりとめのない無意味な疑心暗鬼が排水路のドブネズミみたいにちょこまかと駆け回っていた。

ポールに連絡をとった。彼なら何か知っているかもしれないと思った。電話に出たポールは酷く驚いていた。まず僕から連絡があった

ことで驚いて、その後でティファニーの件で更に驚いた。結果、彼はティファニーの消息は勿論、消失についても全く関知していなかった。僕たちは電話の後ティファニー前で待ち合わせをした。

ポールがやってくるまでの間、僕はティファニー周辺での聞き込みを行なった。有力な情報は得られなかったが、少なくとも三日前はまだ営業していたと、ティファニーが入っているビルの三階でラウンジを経営する強面のおじさんが教えてくれた。そのついでにボーイが足りてないのだがと遠回しに半ば脅迫ともとれる遣り口で勧誘されたが、丁重に断り逃げるように二段飛ばしで階段をかけ降りた。ポールと合流してから更に聞き込み範囲を広げた。居酒屋の店主とか、ラーメン屋のアルバイト、占い師のおばさん、ごみ置き場をあさる烏、ありとあらゆる人と烏にティファニーの消息を聞いて回った。その八割はそもそもティファニーを知らなかった。残りの二割の中でもティファニーが無くなった事を知る人は、ある一人を除いて存在しなかった。僕たちは、走って逃げようとするそのある一人を捕まえて、近くのカフェに招待し話をする事にした。

ウェイトレスが三人分のアイスカフェオレを持ってきた。ウェイトレスは僕達の座るテーブルの異様な雰囲気から逃れるようにそそくさと隣のテーブルのオーダーをとりに行った。

「マスター、何で教えてくれなかったんですか？」

ポールが詰め寄るようにして言った。マスターは俯いたまま微動だにしなかった。トレッドマークの髭はごっそりまるごと剃られていた。そのせいで僕とポールは、ラーメン屋のカウンター席に座り蓮華でスープをすすするその人がマスターであることを見逃しかけた。

「実はね」

僕とポールははっと息を呑んだ。マスターがついに重い口を開いた。それも驚くほどに掠れた声で。カフェに流れるジャズミュージックの音量が心なしか大きいのではと感じさせるような緊張感が僕たちのテーブルを包み込んでいた。カメラのレンズの焦点を合わせるのと同じように、店中の意識のピントが僕達のテーブルに合致してい

るみたいな妙な閉塞感で少しだけ息苦しささえ感じた。

「実は、ティファニーは全くもって俺の店じゃないんだ。俺はあそこの売上で借金を返済させてもらってただけなんだよ」

「マスター借金あるんですか？」

僕は訊ねた。

「誰からですか？ 消費者金融ですか？」

マスターが答える前にポールが質問を被せた。

「あるよ。知り合いに紹介されてある人に借りたんだけどね、どうやら借りる人を間違えたらしい」

マスターはそう言つと、テーブルに静かに千円札を置いて店を出ていこうとした。即座にポールがマスターの腕を掴んだ。

「ちよつと待つてく……」

「君達に何がわかるんだよ。何で俺に構うんだよ」

マスターが振り向き様に声を張り上げた。マスターの剣幕にポールが一瞬怯んだのが僕にはわかった。それに僕も怯んだし、店内の客なんてもつと驚いたに違いない。店内の客が誰も喋っていない。そんな瞬間が、少しではあつたけれど確実にあつた。ちよつと水道の蛇口をぎゅつと閉めたときみたいに瞬時にして店中の会話の流れが止まった。

「君達に何ができるんだよ。教えてくれよ。今俺が君達に胸中を打ち明けたところで、君達は俺に何をしてくれる？ 何もできないよ。できるわけがない」

マスターはカフェの雰囲気なんてお構いなしだと言わんばかりに声を張り上げて僕達を罵った。こんなマスターを見るのは初めてだったし、見たくもなかった。ティファニーの店主は寡黙で無口でシャイでなければ違反であるようにさえ感じられた。しかし最初は迫力があつたマスターの勢いも、喋り終わる頃には線香花火のように力無く繊細な嘆きにも似た様相を呈していた。

「できるかもしれないじゃないですか」

ポールが言つた。

「俺はね、マスターがシェイクしてくれるシングルポール・スリングが大好きなんですよ。ただそれを守りたいだけなんです。もう一度取り戻したいだけなんです。幸い俺にはそれができると思っています」

僕にはポールの「それができる」という言葉の根拠が全くもって想像できなかったけれど、その気持ちだけはポールと一緒にいた。もう一度ティファニーで酒を飲みたい。これ以上の理由はないように思われた。

僕達三人は居心地が悪くなったカフェを後にした。もう二度とこのカフェに来る事は無いだろうと思った。僕達は当てもなく通りを歩いていった。その途中でマスターは僕とポールに話をしてくれた。それもティファニーのマスターらしからぬ実に饒舌な語り口で。

「俺は、十七歳で両親を亡くした。今から十五年前さ。他に身寄りのない俺は、高校を中退して上京した。歌手になりたかったんだ。だからギターを一本背中にぶら下げて電車に乗った。今じゃそのギターもどこにいったかわかりはしない。当時は生活に不安はあったけど両親が残してくれた貯金も多少はあったし、それプラスアルバイトでもやれば何とか暮らしていけるとたかをくくっていた。でもね、都会の風は俺が思っていた以上に何倍も強く、そして冷たかったんだ。身内のいない未成年の青臭いガキを雇ってくれる所なんてそう簡単にはありはしなかった。アパートを借りるお金があるならその分長く食にありつきたかった。だからアパートは借りずに生活していた。路地裏の野良猫と一緒に昼寝したし、奇妙な絵柄の表皮で体中を包みこんだトカゲと今後のお互いの生活について相談し合ったりした。そんな生活を続けていたある日、俺はそれまでの人生で最大の出会いを果たすことになった。絵美子さんとの出会い。と言っても四十過ぎた普通のおばちゃんだけど、その時の俺には彼女が聖母にも見えた。路上に座り込んでギターを力無く引きこなす俺の前で足を止めてくれて、一曲一曲を、一音一音をまるでするめでも囃むように実に丁寧にしてゆっくりと聴いてくれた。そん

なお客さん初めてだったからね、一生懸命歌ったよ。腹減ってたけど、これでもかってくらいに声を張り上げて精一杯歌った。ほんの少しでもいいから届けたかったんだ。俺の生きている証をね。それで死ぬんなら、別にいいと思った。本当だよ」

そこでマスターは話を区切った。僕とポールは真剣にマスターの話に耳を傾けていた。それでも時折繁華街の喧騒で僕達は、現実世界に引きずり戻された。それは居酒屋の客引きの声だったり、綺麗な女の人の魔界への誘いでもあったりした。僕達は繁華街を左に折れて閑散とした路地に入った。少し歩くと外灯に照らされたジャンゲルジムが見えてきた。僕達はその公園で話をする事にした。ブランコが二台あって、その一つにマスター座り、ポールがもう一方に座った。僕は二人と向かい合うようにして、地面に腰を下ろした。マスターとポールの後ろからこぼれる外灯の明かりのせいで僕的位置からはマスターの表情を鮮明に窺い知る事は出来なかった。空には依然として星が輝いていた。

中庭と病棟を繋ぐ扉が開く音がして振り返ると、精神科医が中庭に出てくるところだった。扉が締まる音を聞いて少しほっとした。このまま中庭ですっと生活したい、そう思えるほどに中庭が僕を受け入れてくれていると感じたからだ。中庭という外が僕にとってはどんな中にも勝る程に中だった。どこか生氣に欠ける睡蓮が浮かぶ池とそれを取り囲む少々苔がはびこる石囲い、古ぼけた木製のベンチとその脇に立つ中世ヨーロッパの雰囲気漂う真鍮性の外灯、時折僕の腕を這い登るまだ体に透明なあどけなさが残る小蜘蛛と中庭のあらゆる角っこに張り巡らされたそれらの巣が太陽に照らされて繊細に輝きを帯びる情景。そしてその中に突如として姿を現した訪問者の僕。外界でどんな重罪、例えば痴漢、強盗、もつといこう、殺人、テロを犯して路頭に迷う僕でさえも、ここに一步足を踏み入れてしまえば全ては下らない過去として僕の中で静かに消えるだけだ。ここの住人はここでは無い場所の僕を知らない。要らない干渉に気を滅入らせなくて済むし、こちらが必要ならここの全ては喜んで話を聴いてくれる。それがどうだ、ここから一步でも外に踏み出せばもうそこは地獄、ある意味で天国。もつと生きたいと思えば思う程何かを得ようとすればする程、それとは正反対の力にねじ伏せられて反対側のホームに移動させられる。そのホームにはすでに一台の列車が停車しており、僕は無理矢理その乗り物に詰め込まれる。列車に乗る直前に天の川經由喪失行きの文字が僕の瞳を揺らす。けたたましい音をたてて扉が締まる。地球上の全ての蟻の溜め息をかき集めたような音。ふと車内に目をやる。誰もいない。列車の外から見えていた人混みが幻想だと気づき頂垂れる僕の身を揺らしながら列車は星空に浮かぶ僕の祖母の墓石を突き破り銀河の彼方に消えていく。車窓に浮かぶのは三日月に腰かけて時のハープをかき鳴らす幼顔の月の姫や、超高速の流れ星に必死でつかまる落ちこぼれの夜

の王子様。それを横目に僕だけを乗せた列車は喪失の彼方に猛進を続け、その途中で苔の生えた隕石と衝突する。驚くほど無音の衝突で宇宙に浮かぶ星々の住人の頭に大いなる予感がよぎる。ただよぎるだけ。そして終わる。

「どうだい？　ここ、中々良いだろう？」

精神科医が言った。中々も何も、最高だ。という言葉ポケットにしまいこんで「そうですね。とても良いところだと思います」と返事をした。満足げな含み笑いを浮かべながら精神科医は僕の隣に座った。木製のベンチが微かな悲鳴をあげた。

「もうこのベンチも寿命らしい。いつからここにあるのか解らないけどね。きつと何十年、もしかしたら百年以上も前かもしれない。とにかくずっと前さ」

そう言つて精神科医は木製のベンチの手すりを優しく撫でた。

「寿命つて何者なんですかね？　どんな奴がどんな顔して、人の命奪つていくんだろう」

僕は思いがけずそんな事を口にしていた。意識はあるが意思はない。きつとそんな感じ。夢から醒めた後からずっとだ。夢は夢らしく、大人しく忘却という永劫の世界に葬りさられるべきであつて、こんなにも僕の精神に深く傷痕を残すような事はあつてはならないし、これまでそんな事は経験したことがなかった。そのせいで、僕はあの夢を夢として認識する事が出来なくなつてしまつていた。

「でもね」

精神科医の力強い言葉で少しだけ我を取り戻した。

「でも、もしも寿命が無かつたら大変だよ」

遂に中庭から直接太陽を見ることが出来なくなった。それでも尚、太陽は僕と精神科医と中庭に光を届けてくれていた。刻々と光のバランスが変化して、僕が座っている所は日陰で、精神科医が座っている所は日向になった。光と影の境界線が精神科医の頭を通っていた。強盗が人質の頭部に刃物を傾けているみたいに見えて怖くなつ

たので、精神科医に少しだけ場所を動くように言った。今度は精神科医の首元を境界線が切り裂いた。僕は目を瞑った。

扉が開いた。看護婦が頭を覗かせて、精神科医を呼んだ。どうやら予約の患者が来る時間が近づいているようだった。精神科医は忘れていたと言わんばかりに血相を変えて「カルテどこやったっけなあ」と独り言を呟きながら病棟に戻っていった。そしてまた一人になった。

鳥が空から舞い降りて池のほとりに綺麗に着地した。鳥は何やら噂話を睡蓮に持ちかけている様子だった。「おやおや、睡蓮さん。元気ですか？ あそこのベンチに座っている人間は一体誰ですか？ 新入りですかね？ おやつ。あの人間、以前に外界で何回か見たことがある。あの人間は生きている価値のないくらい腐ったバナナのような人間ですよ。気をつけてくださいね」睡蓮が僕を睨み付けた。それを盗み聞きした小蜘蛛が僕の首筋に噛みついた。外灯が倒れてきて僕の頭を直撃する。木製のベンチが崩れる。空から鳥の大群が現れて僕めがけて唾を吐いた。

鳥の密告で直ちに中庭が踵を返した。僕と中庭は対立した。一体僕が何をしたというのだろうと考えても、はっきりした原因が思い浮かばない。鳥は僕の何を知っていたんだろう、何を見たんだろう。僕があいつを救えなかったからか？ 僕が知らない女の子と一回だけ寝たのを目撃したからか？ 僕がいつまでも始まってもない恋にうつつをぬかしてしるからか？ 僕が彼を止められなかったからなのか？ 鳥はどれの事で、こんなにも沢山の仲間を呼んで僕に報復行為を遂行しているんだろう。僕はにわか雨が止むのを待つみたいに、唾が止むのを待っていた。ぴくりとも動かないで静かに静かに鳥の怒りが静まるのを待っていた。

唾が止んだ。代わりに鳥の大群がボトボトと地面に打ち付けられた。可笑しな光景だった。まるで鳥の剥製の量産技術が開発された工場の見学に来ているみたいだった。鳥達は皆、その体から水分を感じさせてはくれなかった。身体中の水分を振り絞って唾を吐き続

けた鳥達の頑張りが妙に心を打った。それと同時に酷く悲しくなった。そこまでして僕に仕返しする程、僕は重罪を犯してしまっていたらしい。確かに僕にはそれを否定する事は出来なかったし、かといって肯定する心の余裕も無かった。緑色だった地面が茶色になった。鳥が覆いつくしたからだ。僕はそれらを踏まないように注意しながら病棟に繋がる扉の方に向かった。背後から睡蓮のすすり泣く声が聞こえた。僕は振り向かないで病棟に戻った。

帰り際に受付で看護婦に精神安定剤を渡された。看護婦は精神科医が僕には少し愛が足りてないのかもしれないと言っていましたよと教えてくれた。

「そうですか」

僕は言った。もうここに来ることはないだろうと思いつながら玄関のドアを静かに締めた。かちゃんと音を経てドアが締まった。そうするともうドア一つ隔てた病院内とそこで起こった事が遥か遠い場所で遥か昔に起こった事のように思えた。それなのに僕の頭には睡蓮のすすり泣く声が鮮明に響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3715/>

星を輝かせるな

2010年10月28日07時06分発行